

## 資料 : 「オープンソース」という用語

2003 年 オモイカネ株式会社

### オープンソース小史

- 1961 MIT 技術模型鉄道クラブ (TMRC) が PDP-1 をおもちゃとした
- 1969 ARPANET(Internet の前身) が誕生
- 1969 AT&T で UNIX が誕生
- 1970 LAN の誕生
- 1978 BSD UNIX の誕生
- 1984 RMS が GNU の開発を始める
- 1985 FSF の設立
- 1991 最初の Linux のリリース
- 1993 Ian Murdock が Debian プロジェクトを開始
- 1997 DFSG の作成
- 1998 Open Source Initiative 設立

ソフトウェアを共有する思想の萌芽は、1960年代のMIT AI Lab と考えられます。ここではLISPを愛するハッカー達によって、ベンダーによらない独自OS、ITS(Incompatible Timesharing System) が開発<sup>1</sup>され、彼らは自らの技量によってもたらされる自由を満喫していました。ここでは外部研究者や関連会社もふくめてソフトウェアのソースを交換していたので、AI Lab を中心としたグループが最初の「オープンソース」コミュニティと考えられます。

RMS もその伝統を引き継ぐ環境で技官として働いていましたが、ベンダーの方針変更やAI Lab の所長交代などの事情によってコミュニティが崩壊してしまった経験から、MIT を辞めフリーのUnix 互換オペレーティングシステム(=GNU)を開発することにしました。フリーソフトウェアを作成する活動はFSFを設立した段階で明確に政治的な意図を持つようになり、フリーソフトウェア運動と呼ばれるようになりました。

GNU プロジェクトでは Emacs (エディタ)、コンパイラ、シェル、基本ライブラリなどが精力的に開発されましたが肝心のカーネルの作成は遅れに遅れていました。そこにLinux が誕生し他のGNU システムと併せてOS 全体を自由なソフトウェアで構成することができるようになりました。<sup>2</sup>

このようなソフトウェアパーツの集合体はディストリビューションと呼ばれますが、これは技術的上の編集著作物と考えることができます。ソフトウェアパーツの一部の使用を著作権者から否定されてしまうとプロジェクトに大きな後退が発生することから、ソフトウェアが真に自由か否かは慎重に判断する必要がありました。

フリーなディストリビューションであるDebianでは2代目リーダーBruce Perensを中心として、「Debian Free Software Guidelines(Debian フリーソフトウェアガイドライン/DFSG)」と「Debian Social Contract(Debian 社会契約)」が作成されました。DFSGはGPL/X/BSD/Perl Artistic Licenceを含めるように作成されました。

Bruce Perens はその後Debian プロジェクトを去り、よりフリーソフトウェアを社会に浸透されることを目的として、Eric Raymond、Ian Murdock を含めた6人でOpen Source Initiative を設立します。ここでBruce Perens は不満に思っていたフリーの定義を完成させOpen Source Definition としました。

フリーソフトウェアの哲学とオープンソースの哲学の違いは、前者が自由を拡大するために積極的であるべきであると考えのに対して、後者は消極的自由も許容する点です。特にクローズなソフトウェア(商用ソフトウェア)との組み合わせを許すか許さないかで大きな差があります。

<sup>1</sup>PDP-10 用。もともとのベンダー OS が CTSS(Compatible Time Sharing System) だったことから。ITS にはパスワードすらなかった。

<sup>2</sup>このため RMS は OS としての Linux を GNU/Linux と呼ぶようにと、執拗に呼びかけ、煙たがられています。

これは両者での自由の範囲が異なることによります。フリーソフトウェアの哲学での自由は永続的に保証のある自由を意味し、オープンソースの哲学での自由は選択の自由を意味すると考えることができます。

### 「オープンソース」に関連した用語

- 「フリーソフトウェア/free software」  
狭義ではフリーソフトウェア運動を背景とし自由の拡大を意図するソフトウェアです。広義では「フリーウェア」と同じです。
- 「フリーウェア/freeware」  
配布・使用可能なソフトウェアです。Windows 文化の文脈で用いられる場合はソースを提供しないソフトウェアも含まれます。多くの Windows のフリーウェアはソースを提供しないからです。Unix 文化の文脈で用いられる場合はオープンソースと同義ですが若干曖昧になります。<sup>3</sup>
- 「オープンソース」  
OSI のオープンソースの定義を満たしたソフトウェアです。
- 「シェアウェア/shareware」  
配布は自由ですが使用に制限の付くソフトウェアです。普通ソースは非公開されません。
- 「オンラインソフトウェア」  
フリーウェア + シェアウェアを指します。

### RMS のオープンソース運動への貢献

RMS はオープンソース運動に思想面と技術面から貢献しています。

1. オープンソースの社会的意義について正面からメッセージを発信しつづけています
2. OS のすべてのパーツ、とくにコンパイラ・デバッガを作成しました

RMS/FSF は GNU 運動の中で OS のすべての基本パーツを作り上げました。特に C コンパイラを作成したことが重要です。C コンパイラは今日のコンピュータアーキテクチャでは CPU そのものの開発と並行しておこなわれる程アーキテクチャと一体化しており、gcc はベンダー製コンパイラと比肩しうるほどのコンパイラはインパクトの大きいものでした。実際フリーのカーネルは複数 (\*BSD\*, Linux, Hurd, 一部の Tron 等) あるのに対してフリーの C コンパイラは唯一無二の存在です。これはカーネルよりもコンパイラの方が技術的に作成困難であることを意味していると考えられます。

RMS はオープンソース運動や Linux が著名になるにつれて、GNU やオープンソース運動の貢献が希薄化していると感じています。<sup>4</sup>オープンソース運動の担い手は 30 代ですが、一つ世代が上で長年闘争的に自由を拡大しつづけてきた RMS は、オープンソース運動における消極的自由について警告し続けています。これは傾聴に値しますがコミュニティ内でも煙たがられてしまっています。自由は奪われるまでなかなか気づかないものでもあります。

<sup>3</sup>Jargon によると一次期 freeware は Andrew Fluegelman の商標だったそうです。"freeware" was a trademark of Andrew Fluegelman, the author of the well-known MS-DOS comm program PC-TALK III. It wasn't enforced after his mysterious disappearance and presumed death in 1984."

<sup>4</sup>実際情報工学系の学生ですら RMS を知らない人が増えてきているようです。

## 参考資料

- 「A Brief History of Debian」 - Debian Project  
<http://www.debian.org/doc/manuals/project-history/>
- 「オープンソースソフトウェア」 O'Reilly  
第 12 章、Bruce Perens によるオープンソースの定義の解説
- 「OSI Launch Announcement」 - OSI  
<http://www.opensource.org/pressreleases/osi-launch.php>
- 「Gnu の誕生まで」 Bit 誌草稿 / 井田昌之  
[http://www.sipeb.aoyama.ac.jp/ida/books/gnu\\_rms.html](http://www.sipeb.aoyama.ac.jp/ida/books/gnu_rms.html)
- 「Free software and Emacs' origins」 Richard Stallman  
<http://news.com.com/2009-1081-821019.html>
- 「Jargon」  
freeware の説明